

大学における多文化共生に向けた異文化理解の一考察

— 学生交流活動及び地域・国際交流活動から福祉コミュニティの推進へ —

A Study of Intercultural Understanding for Multicultural Coexistence at Universities
— From Student Exchange Activities and Regional and International Exchanges
to the Promotion of Welfare in the Community —

静岡英和学院大学 人間社会学部 鈴木 瑞

1 はじめに

日本における外国人留学生数は2019年に312,214人となり、2012年の161,848人の約2倍¹となった。これは2008年に、日本政府が2020年を目途に留学生受入れ30万人を目指すという「留学生30万人計画」を打ち出したことを基に、日本は外国人留学生（以下、留学生と表示する）の受け入れに大きく門戸を開いたという背景があった。このような中、留学生を受け入れる日本の教育機関の私費留学生の数が年々右肩上がりになっている²。それぞれ違う社会背景の中で育った、文化、習慣、価値観などの異なる多くの留学生が、日本にやってくるという状況で、日本社会がどのようにして異文化を受容し、多文化共生を図っていくのか、という新しい課題が突き付けられている。

本稿は筆者が所属していた静岡英和学院大学及び同短期大学部（以下、本大学と表示する）の留学生センターの、2012年度開設から2019年度までの学内、学外での学生交流、地域・国際交流活動の取り組みに焦点を当て、地域に根差した大学として多文化共生地域づくりに向けた異文化理解の促進について考察し、併せて福祉コミュニティの推進に期待できる効果も検証し、多文化共生社会の実現に向けて大学として果たせる役割を明らかにしたい。

2 先行研究

これまで日本における外国人との異文化理解や多文化共生に関する研究が多くなされてきた。異文化理解教育における問題点として、沼田（2010）は、人間の唯一性の理解と他者の社会的問題の理解が反映されていないということにあり、ステレオタイプの理解を抑制する異文化理解教育の重要性を訴えた。また、川那（2006）は異文化理解教育には「認知的局面」「感情的局面」「行動的局面」という3方向があり、これらを総合的に行うことが理想的であるが、後者2側面の実践面への取り組みが遅れていて、バランスが欠けている現状であると指摘し、実践面での教育方法を提案した。加藤（2013）は、大学キャンパスのグローバル化が進むという現状に、学生が多様性を尊重されかつ対等的な立場で力を発揮できる、キャンパスの多文化共生に向けての環境づくりが重要で、

学生同士の互惠関係を築けるように大学のサポートが重要だと指摘している。この他、日本人と留学生とが共に学ぶ意義についての研究は高橋（2005）、留学生との交流授業が日本人に与える影響と意義についての研究は池谷（2016）、多文化共生を目指し複眼的視点を持つ教育方法を模索する研究は齊藤（2010）が挙げられる。さらに、海外研修を通じた異文化理解・多文化共生に関する考察について塩谷（2017）が挙げられる。

以上示したように日本における異文化理解教育の在り方について多くの研究が行われてきたものの、大学における学生交流活動の取り組みによる多文化共生社会の実現に向けた異文化理解の促進についての研究は、まだ十分なされたとは言えない状況である。そこで、本稿は本大学留学生センターでの学生交流活動及び地域・国際交流活動の取り組みから、多文化共生地域づくりに向けた異文化理解の促進、福祉コミュニティの推進へ期待できる効果について考察し、大学としての役割を明らかにすることを目的にする。

3 学生交流活動における多文化共生地域づくりに向けた異文化理解の促進

3-1) 大学キャンパス内の学生間の交流の実態

前述したように、日本において近年の留学生の受け入れの拡大に伴い、日本全体の留学生数が増加傾向となっている。このような背景の中、本大学に在籍した私費留学生者数は2013年度の146人から2019年度は209人まで上昇し、7年間で留学生数は1.4倍に増えた。本大学は留学生の充実した学生生活全般を支援するため、2012年に留学生センターを設置した。筆者は開設当時から2019年度まで留学生センターの専門員として、相談援助、日本語サポート、学生交流、地域・国際交流活動など、多方面からの留学生支援に携わってきた。

留学生センターが開設された2012年では、本大学に中国、ベトナム、ミャンマーなどアジア諸国を中心とした留学生が在籍していた。しかし、同じキャンパスで学生生活を送る留学生と日本人学生の交流が少なく、同じ国の留学生または日本人学生同士のみの交友関係が殆どであった。日本人学生と留学生の間には見えない壁が立ちはだかるように、学内での留学生と日本人学生の交流風景は殆ど見当たらない状況であった。キャンパス内の大学生の在り方はある意味では社会の縮図のようで、留学生のキャンパス内での孤立は学内の問題より、当時の日本社会や世相の投影のようにも見えた。外国人という日本の「ソト側」にある存在が、社会の「ウチ側」に入るには重い扉が立ち塞がっている。それは「ウチ側」にいる人々の意識には、異なる文化背景の理解や受容が浸透していないということに突き詰められる。石田（1973）は日本の人間関係は同類意識を持つという特徴があり、自分が所属している職場などを「うちの」と見なし、反対に自分以外の相手が所属する範疇を「オタクの」と見なすと指摘している。これは日本の地理的な特徴にも密接な関係性があると考えられる。大陸から離れた島国ということで極めて古くから共同の国民意識が形成されていったと高山（1972）は指摘している。このような日本人の「同類意識」の働きによって、日本と違った背景で育った外国人には、日本社会の「ウチ」に受け入れられるのはハードルが高いと言えよう。

ゆえに、本大学において、留学生と日本人学生との交流が乏しい根本的な理由は、こういった日本での人間関係が形成された長い歴史の中にある複雑な要因にあったと推測できよう。

3-(2) 留学生センターの取り組みによって本大学キャンパス内の学生交流にもたらした変化

学内の留学生が充実した学生生活を送るための支援の一環として携わってきた留学生センターの取り組みは、キャンパス内の留学生に孤立から抜け出してもらい、国境を超えて多くの学生との交流を促進し、異文化理解を深めることに寄与した。学生間の活発な交流により留学生の日本理解が深まると同時に、日本人学生も異文化に触れることができる。それを通して視野を広げ、グローバル社会に適応する人材の育成と本大学の真の国際化の実現にも繋がることが期待できる。さらに、キャンパス内での取り組みを地域社会へ広げ、異文化理解から多文化共生社会づくりへの促進にも貢献できると考えられる。そこで、留学生センターは以下のような取り組みを行った。

- ①学生スタッフの支援体制づくり
- ②学生スタッフが運営する定例会議の定期開催
- ③学生スタッフが主体の学生交流活動の企画、実施
- ④学生スタッフ組織の情報共有の取り組み

3-(2)-① 留学生センター学生スタッフの支援体制づくりへの取り組み

留学生センターが開設された2012年当初、職員が1名配属され留学生の支援にあたった。この状況では留学生センターは留学生だけ利用できる部署になり、日本人学生と留学生の接点を結ぶことが困難になる。もっとキャンパスを活性化させ、学生の人的支援を最大限に活用し、留学生の支援に多くの日本人学生にも関わってもらいたい。そこで、同センターは2012年の初年度から、留学生センター学生スタッフ募集のチラシを学内に掲示した。チラシでは留学生支援や異文化交流に興味のある日本人学生と留学生の両方を募った。チラシを見て留学生支援や異文化交流に意欲のある日本人学生11名の応募があった。また、17名程の留学生からもスタッフの応募があった。これが留学生センター学生スタッフ組織形成の原点となった。これを基に毎年4月に、学生スタッフより新入生向けに学生スタッフ募集説明会を開催し、新メンバーを加えながらスタッフ体制を維持することができた。新設初年度の2012年度から2019年度まで日本人学生スタッフの人数は表1に示したように、初年度は11人でスタートし、2015年度は人数減があったものの、その後年々増え、2019年度は30人まで増加した。これは学生スタッフ主体の各種交流活動の企画、実施への実現が可能になる土台となった。

表1 2012年度～2019年度留学生センターの運営に携わった日本人学生スタッフ人数

年度別	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
人数	11	18	18	9	16	23	28	30

もともと留学生センターは留学生を支援するために設置された部署で、在籍するすべての留学生とつながりながら支援することが可能である一方、日本人学生との接点が薄く、留学生支援に関わってもらうには、日本人の学生スタッフが貴重な人的支援になる。特に各種交流活動において、母国文化紹介などのパフォーマンスの出演に、留学生スタッフに限らずそれ以外の留学生にも協力をお願いすることが可能である一方、活動に携わる日本人学生の場合は、自発性が前提で、自ら携わりたいという意欲がないと参入してもらえないという点から見ると学生スタッフは、なくてはならない貴重な存在となる。また、本大学に在籍している留学生はほぼ私費留学生であり、生活費や学費を工面するため、一日の講義が終わった後や休日にアルバイトをすることが多く、日本人学生と比べると経済的にも時間的にも余裕がないのが現状である。このような状況では、イベントに向けて運営や準備を進めていく作業には、講義終了後などの時間を利用することもあり、日本人学生スタッフのサポートがスムーズな運営に欠かせないものとなる。実際に各種イベントの開催には、留学生スタッフに限らず多数の留学生に協力してもらえたが、日本人学生の場合は、学生スタッフに限るのであった。したがって、ここでは、留学生センター開設以降の学生スタッフの分析には日本人学生スタッフを中心にすることにする。

前述したように、2012年度留学生センター学生スタッフメンバーが確定してから、代表などの役割について話し合い、立候補や選出などで決めてもらい、体制を整えた。そして、前期と後期にそれぞれ週に1回昼休みを利用して学生スタッフ定例会議を開催し、さまざまな学生交流及び地域・国際交流活動の企画、開催についての話し合いが行われた。スタッフ会議では日本人学生スタッフがリーダーを務め、日本人学生スタッフと活動に意欲のある留学生で、各種行事について話し合ったり、情報を共有したりする。したがって、スタッフ会議そのものが日本人学生と各国の留学生の交流の場ともなった。さまざまな行事を進めていく中、スタッフ同士の絆がさらに深まり、国境を超えて多くの友人をつくることができた。日本人学生にとっても留学生にとっても、互いの考え方やそれぞれの国の異文化を身近に感じることができ、理解を深めることに繋がった。

3-(2)-② 留学生センター学生スタッフ主体の学生交流活動の取り組みから見られた学生の成長

留学生センター学生スタッフ体制を整えてから、定期的に学生スタッフ会議を開催し、各種交流イベントの企画、運営、実施に向けた取り組みを進めた。留学生センター学生スタッフ体制は留学生センターが発足した体制であるため、各種活動の企画や運営、実施が学生主体でありながら留学生センター職員のバックアップを受ける形を取った。そのため、毎回学生スタッフ会議開催の前に、留学生センター職員と学生スタッフ代表と打ち合わせをし、情報共有をし、会議の内容や進め方などについて意見交換を行い、必要に応じて職員がアドバイスをする。このような取り組みを年々続

けていく中、留学生センターが年間に取り組む行事が徐々に明確になり、学生スタッフも流れが掴めるようになった。さらに、学生スタッフが経験を積み重ねたことによって各種行事の進め方にも初年度と比べ、年々質の向上が見られた。これは学生交流活動の実施に向けて取り組んでいく過程そのものが異文化の理解の促進の過程でもあり、学生の能力の向上いわゆる成長の過程でもあったと見て取れた。日本人学生と留学生が同じ目標に向かって協力しながら活動を進めていく中、さまざまな異文化体験を経験しながら各種交流イベントをスムーズに運営できるように成長していくことの意義は大きいと言えよう。これこそがグローバル時代に突入した日本の多文化共生社会に求められる能力であり、それは大学のキャンパス内の異文化交流によって身につけることができると言っても過言ではないだろう。さらに、各種活動に携わり仲間と調和を図り試行錯誤しながらさまざまなイベントをやり遂げていくという成功体験から、学生スタッフが喜びと達成感を得ることができ、自信にもつながっていく。そして仲間の気持ちや意見を受け入れながら協力し合い仕事を進めていく中、グループの団結力が高まり、個々のコミュニケーション能力の向上も見られた。前述したように留学生センターの学生スタッフは日本人学生と各国の留学生と一緒に活動するグループであり、国を超えてグローバルな観点からコミュニケーション能力の向上を図れることで、まさしく多文化共生社会に向けた異文化理解の人材育成に一步前進を遂げたとも言えよう。

3-(2)-③ 留学生センター学生スタッフ主体の学生交流活動の実施による大学キャンパス内の異文化理解の促進

2012年度の留学生センター開設の初年度に、留学生支援体制づくりに取り組んだ一環として、異文化交流に関心のある学生を募り、学生スタッフ組織を作り上げた。学生スタッフは定期的にスタッフ会議を開き、各種交流活動の企画、運営などについて協議しイベントの開催を試みた。2012年度から2019年度までの8年間、留学生センター学生スタッフが携わったイベントの活動状況は表2で示した通りである。

表2 2012年度～2019年度 留学生センター学生スタッフが携わる主な学生交流イベントの活動状況

年 度	月	活 動 内 容	参加人数
2012年度	5月	たこ焼き親睦会	40
	6月	世界料理持ち寄り交流会	18
	7月	華道交流会	16
	11月	第47回楓祭への留学生センターの展示、留学生の母国料理の出店	36
	12月	お正月飾り体験	10
2013年度	5月	新入留学生との交流会	20
	7月	スイカ割り大会	30
	8月	フラダンス交流会	11
	11月	第48回楓祭への留学生センターの展示、留学生の母国料理の出店	31
	12月	日本語学校の留学生との交流会	71
2014年度	4月	新入留学生との交流会	40
	6月	華道交流会	12
	11月	第49回楓祭への留学生センターの展示、留学生の母国料理の出店	29
	12月	お正月飾り作り体験	11
		日本語学校の留学生との交流会	89
2015年度	4月	新入留学生との交流会	49
	5月	たこ焼きパーティー	12
	6月	華道交流会	7
	7月	日本語学校の留学生との交流会	60
	11月	第50回楓祭への留学生センターの展示、留学生の母国料理の出店	28
2016年度	4月	新入留学生との交流会	50
	6月	華道交流会	17
	7月	日本語学校の留学生との交流会	70
	11月	第51回楓祭への留学生センターの展示、留学生の母国料理の出店	28
2017年度	4月	新入留学生との交流会	56
	6月	華道交流会	28
	11月	第52回楓祭への留学生センターの展示、留学生の母国料理の出店	26
2018年度	4月	新入留学生との交流会	80
	6月	華道交流会	24
	11月	第53回楓祭への留学生センターの展示、留学生の母国料理の出店	28
2019年度	4月	新入留学生との交流会	80
	6月	華道交流会	40
	11月	第54回楓祭への留学生センターの展示、留学生の母国料理の出店	30

留学生センター開設当時の2012年度では、同センター職員と学生スタッフが一緒に話し合いながら交流活動の企画を手探りの状態で行った。これを土台にして毎年の状況に合わせて多くの試みを行った。このように試行錯誤しながら学生の学業にも考慮し、徐々に準備、実施可能なものに絞っていくことにした。表2にも示したように、2012年度では、5月に留学生センター初のイベントとして「たこ焼き親睦会」を盛大に行い、学生同士の交流を深めた。6月に留学生と日本人学生スタッフがそれぞれ手作りした自国の料理を持ち寄り「世界料理持ち寄り交流会」を開催した。世界の食文化を体験しながら異文化を知る良い機会となった。また、日本文化を学ぶ交流会として開催した「華道交流会」（7月）と「お正月飾り体験」（12月）は、日本文化を学びながら参加者の親睦を深

めた。毎年11月に開催された大学の学園祭である「楓祭」で留学生センター学生スタッフが力を合わせて、留学生センターの展示や模擬店での留学生の母国料理の販売を行った。これらのさまざまな活動を通して従来の学生交流の乏しく活気のないキャンパスが、留学生と日本人学生の活発な交流が溢れる空間へと姿を変えた。

留学生センターが開設された2012年度から、学生スタッフの協力によって、学生交流活動への取り組みをベースに、毎年その年の状況に合わせて開催可能なものを取り入れ、留学生と日本人学生に多くの交流の場を作り出した。2013年度の7月に日本の行事を留学生に体験してもらいながらみんなで楽しむイベントとして、「スイカ割り大会」を開催した。また、8月にフラダンスの先生を招いて「フラダンス交流会」を開催し、女子だけでなく男子留学生も一緒にフラダンスを楽しんだ。そして2013年度から2016年度まで日本語学校の留学生の本大学訪問に合わせて、本大学の学生との交流イベント「日本語学校の留学生との交流会」を学生スタッフの協力を得て開催した。2016年度から2019年度までの活動は、留学生センター開設当初と比べ、活動のパターンの定着化という特徴が見られる。毎年の活動は主に4月の「新入留学生との交流会」、6月の「華道交流会」、11月の「楓祭」（本大学の学園祭）への留学生センターの展示、模擬店での母国料理の出店に向けた取り組みというような流れになった。このように定着した理由としては、これらのイベントの開催の時期は前後していて、学生スタッフ会議でそれぞれのイベントの開催時期に合わせながら活動に向けての準備が見通せることにあった。新年度が始まり4月のスタッフ会議の内容は主に一年生向けの「スタッフ募集説明会」の準備と同時に「新入留学生との交流会」の開催に向けて協議することであった。その後、11月に開催される「楓祭」の出店の申請は5月からスタートということから、5月の学生スタッフ会議もそれに合わせて徐々に展示や模擬出店に向けて話を進めていく。また、6月に開催する日本文化を学ぶ活動の「華道交流会」についても情報を共有する。つまり前期からスタッフ会議で取り上げる内容は前期開催のイベントだけでなく、後期のイベントも含めて話を進めていく。夏休みを挟んで後期に入ると、11月の「楓祭」に向けて前期の話し合いで決めたグループや分担ごとに、スムーズに室内展示や室外模擬店出店の準備に取り組んでいく。このように、留学生センターの学生交流行事は開設の初年度の模索状況から徐々に流れを掴んで定着していく。学生スタッフも経験を重ねるうちに各種活動の開催時期に合わせながら主体的に準備に取り組むことができるようになった。

2013年度から毎年4月に開催する「新入留学生との交流会」は、新しい環境で学生生活を送る新入留学生の不安を軽減することを目的で開催するものである。イベントを通して学生同士の親睦を深め、学校生活などについて情報を共有し、アドバイスやサポートを受けることもできる。このイベントは留学生だけでなく、異文化に興味のある日本人学生も多く参加していた。毎年和やかな雰囲気の中、文化背景の違う留学生と日本人学生の交流によって異文化理解の促進にもつながった。学生同士の絆を深めたことで、学生生活に前向きに取り組むきっかけにもなれた。また、この会で新入生が留学生センター学生スタッフとの交流を通じて留学生センターの取り組みを知る良い機会

にもなり、新しい学生スタッフの人材の獲得にもつながった。

2012年度から取り入れ、留学生センターの恒例行事となった「華道交流会」は、日本文化を学ぶ目的で開催するものである。交流会では、留学生だけでなく、日本人学生も参加し、留学生とグループを組んで、一緒に生け花づくりに取り組んだ。日本の文化を共に学ぶ中、学生同士の交流を深めることにもなった。さらに、毎年11月の学園祭「楓祭」では、留学生センターの学生スタッフと多くの留学生とが力を合わせ、留学生センターの室内展示と留学生の母国料理の出店を行った。前述したように、これらの企画は前期の5月のスタッフ会議から協議され、後期に入ると本格的に準備作業に取り掛かる。模擬店の販売料理は前期の学生スタッフ会議で留学生に料理のメニューの提案と料理の紹介をしてもらう。スタッフ会議で多くの料理が提案された場合、人気がありそうで材料の調達や作れる可能性のあるものを選び協議を行う。模擬店出店は料理販売のスペースに限りがあることで、出店したい国が多い場合、次年度まで調整することもあった。後期では学生スタッフは室内班、模擬店班に分かれて準備を進めていく。各班は日本人学生と留学生でメンバーを構成し、チームで準備作業が行われる。また、毎回2、3ヶ国程度の料理の出店をし、料理ごとに班が編成される。料理の作り方はその国の留学生から同じ班のメンバーに教え共有する。そして、学生スタッフ会議で各班が作った料理の試食会を行い感想や意見を言ってもらう。売れ行きをよくするため、必要に応じて日本人に合った味の調整などについて話し合い、試食することもあった。このようにさまざまな工夫を凝らしながら本番を迎える。「楓祭」は土、日の二日間の開催となり、各班はシフトを組み、作りながら販売に臨んだ。企画から展示や販売に至るまですべての過程は日本人学生と留学生が力を合わせ作り上げた。約半年の間、一つの目標に向けて協力し合い、異文化を取り入れながらお客さんのニーズに合わせる工夫はまさしく異文化理解のプロセスであると言えよう。

外国の異文化が溢れるキャンパスという恵まれた環境を最大限に活用し、日本人学生も留学生も共通の目標に向けてチームで取り組むことで絆が深まり、さらに、異文化の理解も深めることができ、多文化共生社会の適応に大いに役に立つと考えられる。このような国際感覚、異文化コミュニケーションスキル、異文化の力を活かせる能力が学生時代に築き上げられることで、今後社会に出て多種多様な文化が共存する職場、社会へ適応していく際に大いに役に立つと考えられる。異文化経験を持つ学生は卒業後、社会人としてそれぞれ暮らす地域で多文化理解の価値観を広げていき、共に生きる多文化共生社会の実現に向けて重要な人材となることが期待できる。さらに、福祉コミュニティの推進は外国人への支援において異文化の理解が原点である。異文化の実体験を持つ日本人学生は、身に付けた異文化の知識とスキルにより、コミュニティの福祉の推進に大いに役に立つ人材になることも考えられる。そして、留学生にとって日本人学生と一緒に活動に取り組むことで日本語能力を高めると同時に、日本で暮らすのに必要なコミュニケーション能力の向上も期待できる。日本人学生とのチームワークを通して、日本語能力やコミュニケーション能力の向上以外にも日本人の考え方、価値観、習慣等への理解も深めることになり、留学生にとっては日本という異文化への理解が深まり、日本社会、コミュニティでの暮らしに役に立つと言えよう。多文化共生地域づくりには日本人と外国人の相互の異文化理解が必要であり、日本人学生にとっても留学生にとっても

学生時代の異文化経験は多文化共生社会の促進に一助になると考えられる。

4 地域・国際交流活動における多文化共生地域づくりに向けた異文化理解の促進

2012年度留学生センター開設以来、学生スタッフ体制づくりから始まり、定期的を開催するスタッフ会議で学生スタッフ主体のさまざまな学生交流イベントの企画、開催の取り組みをしてきた。それによって大学キャンパス内の異文化交流が活発となり、異文化理解が進んだ。そして留学生センターの取り組みはキャンパス内の学生間の交流活動だけに留まらず、大学の垣根を越えて、多文化共生地域づくりに向けて異文化理解を促進するための大学の役割を果たし、地域・国際交流活動にも力を注いだ。

2012年度から2019年度まで留学生センターが取り組んだ地域・国際交流活動は大きく分けて2つのパターンに分類できる。

- (1) 学外開催の国際交流活動への参加協力
- (2) 本大学主催の地域・国際交流活動の開催

4-(1) 学外開催の国際交流活動への参加協力による多文化共生地域づくりに向けた異文化理解の促進

4-(1)-① 学外の国際交流活動への参加協力

2012年留学生センター開設以来、留学生の学生生活全般を支援するため、多方面の支援を試みた。その一つの取り組みが、地域交流を通じて異文化理解を深め、日本社会との関わりの中、支援の輪を広げることである。最終的に多文化共生に向けて誰もが暮らしやすい地域社会づくりにもつながることができると考えられる。本大学に在籍している留学生はほぼ私費留学生であることもあり、学生生活に必要な費用はアルバイトで維持する人が多い。このような背景をもつ留学生の行動範囲は学校とアルバイト先に限られることが多く、日本にいても日本社会との接点が少なく日本人との交流は乏しい状態である。このままの状況だと、日本で暮らしていても日本理解を深めるまでには至らない。また、日本社会への母国文化の発信も困難であり、地域社会の異文化理解、受容の促進の役割を果たすことも困難であると考えられる。そこで留学生センターは留学生と地域社会の間に多くの接点を作り、支援の輪を広げることにより力を注いだ。多くの日本人と触れ合う機会を提供することで、互いの交流を深めることができ、社会全体の異文化理解の促進に繋がり、多文化共生社会づくりに貢献できると考えられる。このような観点から、留学生センターは静岡県内で開催されるさまざまな国際交流活動に留学生への参加協力を呼びかけた。留学生支援を図ると同時に、多文化共生地域づくりに向けた異文化理解の促進に本大学の役割を果たし、地域貢献を試みた。その結果、2012年度から2019年度まで留学生センターの働きで留学生が関わった国際交流活動は主に表3の通りである。

表3 2012年度～2019年度 留学生が携わった主な地域・国際交流活動

2012年度～2019年度 地域・国際交流活動	活 動 内 容
焼津海岸清掃	海岸清掃及び海岸清掃を通して参加者との交流を深める
藤枝市国際交流セミナー「ミャンマーの料理とお話」	ミャンマーの料理と現状を紹介する講座
島田市「中国の方々との交流会」	島田市のイベントへの協力参加
静岡市「春節・新年会」	静岡市のイベントへの協力参加
はびねす EIIWAカレッジ公開講座 「知ってみよう！身近なアジアの文化」	障害者及びご家族の方に留学生の母国文化を紹介し交流を深める
留学生ホームビジット事業	静岡県主催の留学生と日本の家族との絆を築くことで支援につなげる事業
留学生との交流（御前崎市ホームステイ）	ホームステイを通じて日本人の暮らしを体験し、市民との交流を深める
おむすび体験ワークショップ	日本の食文化を学び地域の方と交流を深める
世界お茶まつり	静岡県主催イベントへの協力
アースカレッジ	静岡県民に母国文化紹介の講座
御前崎市シニアスクールと交流	シニアと小学生に母国文化を紹介し、異文化理解を深める
日本平動物園国際交流イベント	動物園の来場者に母国文化を紹介し、異文化理解を深める
富士山クリーンアップ登山大作戦	富士山清掃と清掃を通して参加者同士の交流を深める
大谷崩れ記念植樹活動	大谷崩れで記念植樹を行い親睦の輪を広げる
東アジア「食と農」地域フォーラム	静岡県主催のイベントに通訳協力
静岡県・国際交流バスツアー	静岡県内大学生交流イベント
日越交流・日本文化体験	日本文化を体験する交流イベント
日本舞踊公演	日本舞踊に出演し、平和への思いを伝える
FM-HI!ひるラジ！ラジオ番組生出演	「静岡と世界をつなぐ」番組で留学生生活や母国文化紹介
静岡県小、中、高校生に母国文化紹介	母国文化を紹介し異文化交流を深める
袋井クラウンメロンマラソン	袋井市主催のイベントに通訳協力
新朝鮮通信使・日韓大学生交流会	静岡県主催イベントへの協力参加
異文化コミュニケーション～世界の人とスキを語ろう	留学生と静岡市で働く社会人と交流し、異文化理解を深める
日本平マラソン	ボランティアスタッフとして協力
静岡県・浙江省友好提携35周年記念 日中青年代表 交流「日中交流架け橋プラン」報告会・交流会	通訳として協力
静岡・竜南文化振興会 総会記念コンサート	スリランカ民俗舞踊を表演
WFWP留学生日本語弁論大会・静岡県大会	スピーチ発表
WFWP女子留学生日本語弁論全国大会	スピーチ発表
バングラデシュ市長団 静岡訪問記念交流会	バングラデシュと日本の交流を深める交流会
「わわわ」	合宿型の静岡県内の大学生交流イベント
静岡版創作舞妓ストリートファッションショー	地域活性化を目的とするイベントへの参加協力
御殿場市国際交流フェア	インドネシア舞踊表演
下田国際友好コンサート	インドネシア舞踊表演
異文化理解講座	一般市民に母国文化を紹介し、異文化理解を深める
インドネシア日本教育文化フェスティバル	インドネシア舞踊を披露し異文化交流を深める
日中青年代表交流	通訳として協力
第1回静岡わいわいワールドフェア	静岡市のイベントへの協力、母国料理出店
グランシップ「春の音楽祭2020」	静岡県主催イベントへの合唱出演

表3から分かるように、留学生センターの働きかけで、留学生が本大学の垣根を超え、静岡県内で開催された数多くの国際交流活動に積極的に携わることができた。これらの活動を通じて留学生が多くの人々と触れ合うことができ、日本理解を深めると同時に地域住民との絆を築ける良い機会ともなった。

4-(1)-② 「ふじのくに留学生親善大使」の活動

留学生センターは開設以来、本大学の留学生に「ふじのくに留学生親善大使」にも積極的に応募するように働きかけた。「ふじのくに留学生親善大使」は「母国と日本の架け橋として期待され、静岡県と世界との友好交流の役割を担う民間大使」である。毎年、募集情報を留学生に周知し、事業の意義や活動内容などについて説明をする。そして、応募者に対して応募のサポートも徹底した。留学生センター開設前は留学生のサポートが行き渡らないこともあり、「ふじのくに留学生親善大使」について広く知られることがなく留学生の理解が欠けた状態であった。したがって、留学生からの関心が低く「ふじのくに留学生親善大使」に応募する留学生もいないという状況であった。留学生センター開設以来、留学生への周知などの取り組みによって国際交流活動に意欲の高い多くの留学生から応募があった。その結果、毎年本大学の留学生が静岡県から「ふじのくに留学生親善大使」に任命され、静岡県内の多くの国際交流活動に携わることができた。任命された留学生親善大使は各種交流活動を通して積極的に母国文化を発信し、静岡県民との友好交流を深めた。このような活動を通じて留学生と静岡県民との異文化理解を深め多文化共生地域づくりの促進に貢献できた。2012年度から2019年度まで本大学の留学生の「ふじのくに留学生親善大使」に任命された人数と国別は表4に示した通りである。

表4 2012年度～2019年度「ふじのくに留学生親善大使」状況

年度別	人数	国 別
2012年度	3	中国
2013年度	4	中国 ベトナム ミャンマー カンボジア
2014年度	5	中国 ベトナム ミャンマー
2015年度	8	中国 ベトナム ミャンマー フィリピン
2016年度	4	中国 韓国 ベトナム
2017年度	7	ベトナム ミャンマー スリランカ
2018年度	6	ベトナム ミャンマー ネパール インドネシア
2019年度	7	中国 ベトナム スリランカ インドネシア
合 計	44	9ヵ国

表4から分かるように、2012年度から2019年度まで本大学「ふじのくに留学生親善大使」に任命された9カ国44人の留学生が静岡県の国際交流活動に携わった。このような多国籍の留学生が静岡県の民間大使として活躍したことが静岡県の豊かな国際交流の実現に大きな役割を果たしたと考えられる。

4-(1)-③ 「留学生日本語弁論大会」への参加

留学生センターは設立以来、留学生への支援の輪を広げ、異文化理解の促進のため、学外開催される各種国際交流活動情報を随時留学生に発信し参加を呼び掛けている。その中の取り組みの一つとして、毎年開催される「WFWP留学生日本語弁論大会・静岡県大会」(世界平和女性連合企画)

の募集情報も留学生に周知し、積極的な応募を呼び掛けた。さらに、応募者に対して、手厚くサポートし、応募原稿の添削から発表のリハーサル練習まで、徹底的に指導を行った。このような支援を行った結果、本大学から毎年留学生が弁論大会に出場できるようになり、スピーチ発表を通して地域社会に母国のことや日本での留学生生活で感じたことなどについて発信できるようになった。そして毎年受賞するほどの良い成績を収めた。さらに、2017年度の「第14回WFWP留学生日本語弁論大会・静岡県大会」（世界平和女性連合企画）では、本大学のミャンマー人留学生が最優秀賞を獲得した。その後、地方大会の予選を勝ち抜き、「第21回WFWP女子留学生日本語弁論全国大会」（世界平和女性連合企画）に出場でき、奨励賞を受賞することができた。今回のスピーチの受賞テーマは「世界平和のためにできること」で、留学生が母国で起こったことと自分の平和への思いを語った。このような機会を利用し、本大学の留学生が母国や日本での留学生生活などのことを積極的に日本社会に発信し、日本社会の異文化への関心を高めるきっかけをつくった。したがって、異文化の理解や受容の一助にもなったと考えられる。2012年度から2019年度まで、本大学留学生の日本語弁論大会参加状況は表5に示した通りである。

表5から分かるように、留学生センターの支援を受け、2012年度から2019年度までの8年間に、本大学の各国の留学生計16人が、留学生日本語弁論大会・静岡県大会及び全国弁論大会（世界平和

表5 2012年度～2019年度 留学生日本語弁論大会（世界平和女性連合企画）参加状況

年度別	人数	国・地域別	発表タイトル	受賞状況	
				静岡県大会	全国大会
2012年度	2	ミャンマー	私の国と日本	優秀賞	
		ベトナム	私の日本留学生生活	奨励賞	
2013年度	2	フィリピン	私の日本留学生生活	優秀賞	
		カンボジア	私の国と日本	審査員特別賞	
2014年度	3	台湾	私の国と日本	審査員特別賞	
		ミャンマー	私の日本留学生生活	努力賞	
		中国	私の日本留学生生活	努力賞	
2015年度	1	フィリピン	私の日本留学生生活	優秀賞	
2016年度	1	ミャンマー	私の日本留学生生活	努力賞	
2017年度	1	ミャンマー	世界平和のためにできること	最優秀賞	奨励賞
2018年度	3	ミャンマー	私の日本留学生生活	優秀賞	
		中国	世界平和のためにできること	奨励賞	
		スリランカ	世界平和のためにできること	努力賞	
2019年度	3	インドネシア	世界平和のためにできること	奨励賞	
		中国	世界平和のためにできること	努力賞	
		スリランカ	私の抱負	努力賞	
合 計	16	8	受賞回数：17（静岡県大会：16 全国大会：1）		

女性連合企画)で計17回の受賞を果たした。日本語弁論大会を通じて、留学生がそれぞれの母国のことや、日本での留学生生活への思い、将来の夢、世界平和のために考えたことなどについて日本人に語り伝えることができ、地域社会の異文化の理解の促進に一役を果たした。

このように留学生センターは大学の垣根を越えて、学外で開催される各種国際交流活動に留学生に関わってもらいように働きかけて支援したことで、多くの留学生が国際交流活動に携わることができた。そして、活動を通して貴重な経験を積み、日本語や日本社会で暮らすのに必要なコミュニケーション能力が向上し、日本理解を深めることもできた。それによって、大学やアルバイト以外にも日本社会との接点もでき、多くの出会いによって友の輪を広げることにもつながった。さらに、地域社会の住民にも留学生のことや留学生の母国の文化を知ってもらうことができ、多文化共生地域づくりに向けた異文化理解の促進に大きな役割を果たした。

4-(2) 学内開催の地域・国際交流活動による多文化共生地域づくりに向けた異文化理解の促進

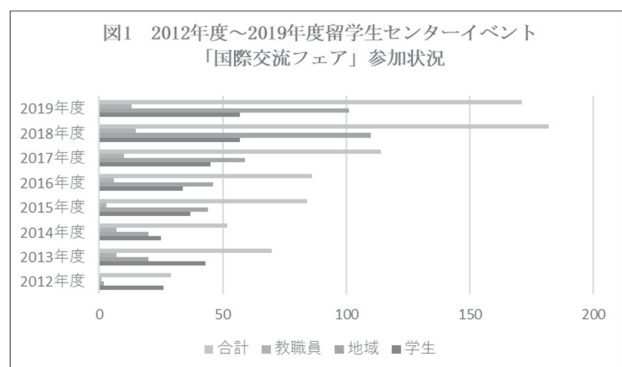
留学生センター開設以来、留学生の学内の学生交流の促進や学外の地域・国際交流活動への参加協力の呼びかけなどの取り組みを通して、留学生支援の輪を広げた。地域密着大学という目標を掲げている本大学は、それを実現するため、地域住民との交流が必要不可欠であると考えられる。本大学にはアジア諸国を中心に多国籍の留学生が学生生活を送っていることもあり、地域住民に知ってもらい、交流を図ることによって異文化理解の推進、多文化共生地域づくりの一助になると考えられる。このような観点から、留学生センターが開設された2012年度から学生スタッフの協力を得て地域住民との交流会の開催を試みた。毎年試行錯誤しながら経験を積み、留学生センター職員と学生スタッフの努力によってイベントの評判は徐々に広がり、2012年初年度からの小規模の開催から2019年度までには本大学の一大イベントに発展した。2012年度から2019年度まで留学生センター主催の地域交流イベント「国際交流フェア」の実施状況は表6、図1に示した通りである。

表6、図1から分かるように、本大学留学生センター主催の地域交流イベント「国際交流フェア」(2012年度は「留学生センター報告・交流会」、2013年度から2014年度までは「地域の方々との交流

表6 留学生センター主催地域交流イベント

「国際交流フェア」実施状況

年度別	参 加 人 数			
	学生	地域	教職員	合 計
2012	26	2	1	29
2013	43	20	7	70
2014	25	20	7	52
2015	37	44	3	84
2016	34	46	6	86
2017	45	59	10	114
2018	57	110	15	182
2019	57	101	13	171



会」と称した)開催当初の2012年度の参加者人数29人と比べ、2017年度から百人を超える規模となり、本大学の一大イベントにまで発展した。このような成功に導けたのは、留学生センター職員、異文化理解協力団体、学生スタッフ、各国の留学生が力を合わせながら取り組んだ結果だと言える。2012年度当初は初の試みであるため手探り状態で、開催時間は学生の空き時間を考慮し、参加可能な昼休みを利用して開催することにした。参加者は留学生の割合が多く、広報が不十分ということもあり、外部の参加者は2名のみとなった。しかし、短い時間の交流会であったものの、会は終始和やかな雰囲気の中で行われ、参加者はゲームを楽しんだり会話が弾んだりして親睦を深めることができた。本大学として初の地域向けの留学生との交流イベントにおいて、初年度の少人数の参加にもかかわらず、開催すること自体に大きな意義があると思われる。それはキャンパスの垣根を越えて、多文化共生社会に向けた異文化の浸透や理解の促進に、大学としての役割を果たす歴史的な一歩を踏み出したということであった。

以上で述べたように、本大学留学生センター主催の地域交流イベント「国際交流フェア」は同センター開設の2012年度から毎年開催するようになり、規模や影響力が徐々に大きくなり、学内外にも注目される程のイベントに発展した。2013年度は前年度の開催時間の短い点を改善するため、平日の午後に1時間半程の時間を設けて開催することにした。2回目の開催で、本イベントが学内に前年度より知られることになり、教職員の参加者が増える結果となった。また、本大学の教員が異文化理解授業の一環として学生を連れて参加したこともあり参加人数の増加につながった。そして、この年度から毎年静岡市にある異文化理解促進団体にも協力を得るようになり、プログラム作成の打ち合わせや学外への情報発信の協力、イベント当日のサポートなど連携を取りながら取り組むようになった。このように外部団体の協力によって学外への広報は前年度より範囲を広げることができ、地域からの参加者人数を増やすことに繋がった。2014年度の開催では、前年度の2013年度と同じく平日の午後、1時間半程の時間設定での開催であったが、前年度のように本大学の教員は授業内容に入れることができなかったこともあり、学生の参加者数は2013年度より減少することとなった。しかし、これは特別の要素が含まれていない場合の、イベントの本来の形でもあり、交流会は地域住民と学生の異文化交流を通して理解を深めることができた。

2015年度から2016年度の「国際交流フェア」の開催は、以前の平日の開催で授業のある学生が参加できなかったことと、平日に働いている地域の住民が参加しにくいという欠点を改善するため、1月の第2土曜日での開催へ切り替えた。この試みによって学生や地域住民が参加しやすくなり、例年より参加者の増加に繋がり、地域からの参加者は2013年度と2014年度に比べると2倍以上増加した。しかし、大学への入学試験であるセンター試験日と重なったことで、教職員の参加人数を増やすまでには至らなかった。このことを改善するため、2017年度から2019年度までは、開催日程を1月の第1週の土曜日に変更し、以前と比べるとさらに参加しやすくなり、それと毎年の広報やプログラムの充実を図った努力の結果、百人の規模を超える大きいイベントまで発展ができた。毎年イベントの参加者から好評を得たことで、イベントの知名度が地域で徐々に広がり、さらに、イベントの広報や情報発信に学内学外の関係者の協力を得て取り組んだ結果、2018年度と2019年度は地

域からの来場者は例年より大幅に増え、百人を超えるまでに至った。イベントを通して、本大学の留学生の母国の文化を地域住民に知ってもらうことができたと同時に、地域住民との友好交流も深めることができた。地域社会の異文化理解の促進に大きな貢献となり、外国人も日本人も暮らしやすい多文化共生社会づくりのために、大学として一翼を担うことができると考えられる。

以上で述べたように、本大学留学生センターは、留学生に学外開催の国際交流活動への参加協力の働きかけや大学主催の地域・国際交流活動の開催を通して、地域社会の異文化や留学生への理解を深めた。また、留学生が地域のことを知り、日本理解を深めるきっかけを作った。相互の交流によって文化、習慣、価値観に触れ合うことは、異文化の理解から異文化の受容、そして多文化共生社会へのプロセスの促進につながると考えられる。また、互いに支え合い住みやすい福祉コミュニティの構築には、多様な文化背景を持つ外国人への理解、受容が必要不可欠であり、地域の一員として暮らす留学生に対する理解が深まることによって、外国人住民の地域社会からの孤立を防ぐ効果にも期待できると言えよう。そうなれば、社会生活に必要な情報や災害時の対応、制度、サービスなどの社会資源は、外国人住民にも行き届くことが可能となり、福祉コミュニティの構築の促進につながることができると考えられる。さらに、日本人学生スタッフと留学生の協力による「本大学主催の地域交流イベントへの取り組み」（実施まで）は、学生同士がそれぞれ文化背景の違う仲間と、同じ目標に向かって活動する過程でもある。この経験から得られる異文化コミュニケーション力、チームワーク力はまさに多文化共生社会への適応に必要な能力でもある。学生時代に身に付けたこの国際感覚、異文化理解、異文化協調力は、今後それぞれの社会生活の拠点で、多文化共生社会促進の役に立つと期待できる。このようなことから、多文化共生社会に適応し、将来、社会や福祉コミュニティの推進を担う人材の育成は、大学として果たせる役割が大きいとも言えよう。

5 まとめ

ここまでは本大学留学生センター2012年度から2019年度までの留学生支援事業における多文化共生地域づくりに向けた異文化理解の促進の取り組みについて見てきた。本センターが開設される前のキャンパス内の留学生と日本人学生の交流が乏しい現状を打破し、大学の活性化を図るため、本センター開設の2012年度から学生同士の異文化交流の推進に力を注いだ。そのため、学生協力スタッフを募集し、留学生支援及び異文化交流に興味のある学生が集まり、学生スタッフ支援体制を作ることになった。この学生スタッフ募集によって本来日本人学生との接点がない留学生センターは、留学生支援に意欲のある日本人学生が集まり、貴重な人的支援を獲得することとなり、その後の活動を成功に導く鍵となった。学生スタッフ体制が形になることで、学生スタッフを中心に、学内でさまざまなイベントの企画、実施を試みた。週1回のスタッフ定例会で日本人学生と留学生は一緒にさまざまな活動について企画し、実施に向けて取り組んだり、または学園祭に向けての準備をしたりして、スタッフ定例会そのものは日本人学生と留学生との異文化交流の場となった。そして、会議で企画したイベントの実現によって、学生スタッフは達成感を得ることにも繋がり、経験を積

み重ねるにつれて大きな成長を遂げた。また、さまざまな学生交流イベントの実施を通して、留学生と日本人学生の交流促進や、日本文化の理解を深めることができ、日本人学生が留学生の母国の文化に触れることによって、彼らは視野を広げることができた。したがって、これらの作用により多文化共生社会に適した人材の育成や、異文化理解の促進にも貢献できた。

留学生センターの取り組みは本大学内の学生交流による異文化理解の促進だけでなく、留学生の支援の輪を広げ、母国文化を多くの地域住民に伝え異文化理解の促進を果たすため、静岡県内で開催されたさまざまな地域・国際交流活動にも、留学生の積極的な参加協力を呼びかけた。その結果、留学生が学外開催の多くの国際交流イベントに携わることができ、母国の文化を多くの人々に伝え、地域社会の異文化の理解に大きな役割を果たした。それと同時に、留学生は地域住民との交流を深めることができ、日本理解を深め、地域住民との繋がりによって支援の輪を広げることもできた。

本大学留学生センターの地域・国際交流における取り組みは、留学生に学外で開催される各種国際交流活動への参加協力の働きかけだけに留まらず、本大学での地域・国際交流活動の開催も試みた。留学生センター開設の2012年度は手探りの段階で、準備や広報が充分でなかったため、学生中心とした小規模のイベントの開催となった。しかし、地域から異文化に関心のある住民2名が来場され、参加者同士は楽しい交流ができた。その後、毎年改善を重ね、学生スタッフ、協力団体と一緒に取り組んだ結果、「国際交流フェア」は楽しい異文化交流の場として徐々に地域の住民に知ってもらえることができ、来場者の増加に繋がった。2017年度から来場者が百人規模を超えた本大学の一大イベントにまで発展した。また、マスコミにも取り上げられ、地域社会に広く知られることができた。「国際交流フェア」の開催は地域密着の大学として本大学の役割を果たすことができ、多文化共生地域づくりに向けて地域社会の異文化理解の促進に大きく貢献できた。この他、留学生センターの活動を留学生センター通信やホームページなどを通じて迅速に情報発信し、留学生の活躍ぶりを多くの人々に伝えることができ、多文化共生社会に向けて異文化理解の促進に一役を果たした。

6 学生交流活動及び地域・国際交流活動から福祉コミュニティの推進へ ～今後に向けて

異なる文化が共存する大学のキャンパスは、学生の豊かな国際感覚を養う絶好の環境である。如何にしてこの異文化学習の資源を最大限に活用し、それぞれの文化背景の違う学生に習得させるかは、教育を提供する立場側に立つ支援者には常に高い意識を持つことが求められる課題である。本大学留学生センターはキャンパスの多種多様な文化的背景の学生の特色を土台にして、留学生の充実した学生生活支援という目的で、日本人学生に参入してもらうことに成功した。その結果、学生同士の異文化交流が盛んになり、日本人の学生は視野が広がり、異文化理解、適応する能力の向上が見られた。さらに、学生交流や地域・国際交流活動を通して、留学生にも日本語能力の向上効果が得られたと同時に、日本人の考え方、価値観を知ることができ、日本社会への理解を深めること

ができた。このような取り組みでそれぞれの学生は、コミュニティで暮らしていくのに必要なコミュニケーション能力も高めることができ、そこから得た経験は大学の垣根を超え、多文化共生社会や福祉コミュニティの推進に必要な知識、異文化価値観、異文化コミュニケーション能力を身に付けることにも繋がった。日本人学生と留学生の相互の異文化理解、受容の実体験は、多文化共生社会の構築に大いに役に立つと期待できよう。さらに、福祉コミュニティの構築には、外国人への理解不足によって生じた差別や偏見をなくし、外国人住民の地域社会からの孤立を防ぎ、人権や権利の尊重、擁護、各種制度やサービスの利用の周知、非常時や災害時などの情報不足の解消、多様な文化背景を持つ外国人への理解と受容などが必要不可欠である。本大学留学生センターは留学生支援における取り組みの中で、本大学の人的資源を活用した地域への異文化理解の促進活動の過程で、学生自身の成長を促した。それと同時に、これらによって育まれた学生の力は、多文化共生社会や福祉コミュニティの推進を担う人材育成の観点から地域に根差す本大学としての役割を果たすことにも繋がっていく。地域の一員として暮らす留学生に対する地域住民の理解が深まることによって、外国人住民の地域社会からの孤立を防ぐ効果にも期待できると言えよう。また、学生時代に身につけた異文化体験を、今後はそれぞれが置かれる生活拠点としてのコミュニティや職場にさらに広げていき、社会全体の変化をもたらすことも考えられる。さらに、多種多様な異文化を受け入れることで、日本人主流のホスト社会に新しいパワーが注がれることにもなり、地域再生の源や地域の活性化にもつながることが期待できよう。したがって、本大学は学生交流活動及び地域・国際交流活動の取り組みを通して、学生自身の成長や地域住民の異文化理解の促進を実現でき、そのことによって福祉コミュニティの推進にプラスの効果をもたらすことができると言えよう。このような異文化との融合が図れる地域社会は、さらに発展することが期待できよう。

以上、本大学留学生センターの留学生の学生生活支援における取り組みについて見てきた。異文化理解や受容においては留学生だけでなく、日本人にも同じように対等で、相互の文化の理解と受容が必要であり、そのための第一歩として、互いの交流を深めることが必要不可欠であると考えられる。交流がなければ互いに知ることも理解することもできない。交流がなければ多文化共生社会づくりや福祉コミュニティの推進は机上の空論に過ぎない。

7 今後の課題

本稿は本大学の留学生センターの学生交流、地域・国際交流活動への取り組みを中心に考察を試みた。本大学留学生センターの事業において職員が少ないことで学生スタッフが重要な人的資源となった。しかし、学業の繁忙期に学生に負担をかけないような工夫も課題である。また、本大学は小規模の大学としてこのような取り組みで一定の成果を得ることができた。しかし、本大学のような留学生支援の組織と異なる場合においては、適切な支援の在り方について今後検討する必要がある課題としたい。

【参考文献】

- 池谷知子（2016）「留学生との交流授業が日本人に与える影響と意義」『神戸松蔭女子学院大学研究紀要』5，pp.55-70.
- 石田英一郎篇（1973）「日本的人間関係の構造」. 谷川徹三 ほか.『現代評論集』筑摩書房.
- 加藤美常美代 編著（2013）『多文化共生論』明石書店.
- 川那部和恵（2006）「異文化理解教育における実践的アプローチの可能性」奈良教育大学『教育実践総合センター研究紀要』15，pp.53-60.
- 沼田潤（2010）「日本人大学生の異文化理解に関する質問紙調査：異文化理解の意識に関わる諸要因の基礎研究」同志社大学『評論・社会科学』91，pp.169-186.
- 齊藤仁志（2010）「〈実践研究〉多文化共生を目指し複眼的視点を持つ その方法と課題」『長崎ウェスレヤン大学現代社会学部紀要』8（1），pp.63-69.
- 塩谷もも（2017）「海外研修を通じた異文化理解・多文化共生に関する考察－「アジア文化演習」を通じて－」『島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要』56，pp.179-189.
- 高橋亜紀子（2005）「日本人学生と留学生とが共に学ぶ意義：『異文化間教育論』受講者のコメント分析から」『宮城教育大学紀要』40，pp.15-25.
- 高山岩男（1972）『文化類型学的考察 日本民族の心』玉川大学出版部.

【注記】

- ¹ 独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）「2019（令和元）年度外国人留学生在籍状況調査結果」によると、令和元年5月1日現在の留学生数は312,214人となり、年々増加傾向で2012年の161,848人の約2倍となった。
https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2019.html（2020年9月7日閲覧）
- ² 独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）「2019（令和元）年度外国人留学生在籍状況調査結果」参照
https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2019.html（2020年9月7日閲覧）